

琉球大学学術リポジトリ

琉大ミュージカルの目指すもの：
プロフェッサー・オブ・ザ・イヤー受賞記念投稿

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学グローバル教育支援機構 公開日: 2020-08-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 服部, 洋一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/46585

プロフェッサー・オブ・ザ・イヤー受賞記念投稿
琉大ミュージカルの目指すもの

教育学部音楽教育専修
教授 服部洋一

はじめに

音楽教育専修提供の「総合舞台芸術演習」と心理臨床科学コース提供の「音楽と言語」とは、以前にも琉大ニューズレターvol.10においても紹介したように、ミュージカル制作を通して、「人間力」を養い「生きる力＝総合的能力」を啓発するための授業を展開し続けてきた。この授業は1999（平成11）年度に「人間と音楽」（総合演習 XV）という科目名で誕生し、その後、学部改組や科目カテゴリーの変更に伴い「総合舞台芸術演習」「音楽と言語」「民族と音楽 I～III」などの合併授業科目として設けられるようになり、また後述するように、開講後数年のうちに音楽教育専修や心理臨床科学コース（当初は、教育カウンセリングコース）の学生ばかりでなく、総合大学である琉球大学全学部から学生が続々と受講を希望するようになり、共通教育的様相を呈し始めてきたこともあり、一昨年度、共通教育科目として「ステージスタッフ総合活動」も設置するに至った。それらの科目を「琉大ミュージカル（RM）」と総称して現在に至っている。学外者・社会人向けの「公開授業」にも開いており、一般社会人やミュージカルが授業として設置されていない県内中部の他大学生・卒業生らも、その受講生として参加している。

2018年、琉大ミュージカルは開講以来20周年を迎え、一昨年12月23日、24日の2日間にわたり、大学会館で「琉大ミュージカル20周年記念公演」も開催し、ここには過去の琉大ミュージカル（以下RMと略記）卒業生で、現在社会人として活躍しているOBOGが現役生とコラボレーションを行い、熱いパフォーマンスを繰り広げ、4公演とも大学会館に満場の観客を動員しRMのアニバーサリー・イヤーを奏することが出来た。

近年、設置した共通教育科目「ステージスタッフ総合活動」では、受講生からの高評価を受けることが出来、担当教員の筆者がありがたくも2018年のプロフェッサー・オブ・ザ・イヤーに選出されたことを機縁として、今回ここにRMの20年の歴史を振り返る記述をさせてもらうこととなった。

1. 総合演習としてのミュージカル

開講当時（1999年後期）は「総合演習 XV」という名称で、教育学部音楽教育専修が提供する教職関係科目の位置づけであった。総合演習とは、将来、小・中・高の教職に就く学生が、学校教育における「総合学習の時間」を進めていくことが出来る力を養うために、合科的授業を展開することの出来る教師を目指す内容に重点を置く科目群のひとつとして出発したのであった。この元来の目的は、RMにおいて、当然のことながら、その授業目的の根幹として息づいている。また学校教育ばかりでなく、一般社会においても地域・社会のリーダーとなり、生涯学習・生涯教育を責任を持って推進していく使命を担うような立場に立たされた場合に、ここで学んだ原理原則・ノウハウを積極的に活用し、文化芸術を通して、地域社会に於ける人材育成にも多大に貢献し行くことの出来る素地を養うことにも繋がっている。

特に音楽教育専修の学生としては、ただ歌うだけ、楽器を奏でるだけでなく、演技という表現力の向上、健康維持増進とダンス、ボディー・ムーヴメントを通しての保健体育的知識と能力、台本の読み込みや解釈・台詞まわしといった国語力、衣装・道具・背景画作製などの家政（被服）・技術工芸・美術力、また作品の背景を理解しスタイルを学ぶ文化歴史的知識・異文化理解力（地理・歴史）、登場人物の心の内面を探求し表現に結び付けていく心理分析力・表出力を養い、しかもこれらの事柄を楽しく学べ、上述のように、ここで得たノウ・ハウを、やがて教育現場や地域社会においてもミュージカルを通して児童・生徒、青年、ひいては壮老年にまで教えていくこと

の出来る資質を養える授業にしようと考えたわけである。

2. 転機

立ち上げて4年ほどは音楽教育専修の実技系4名の教員によるTT形式をとっていたが、筆者以外の3名が開講4年目(2002年度、平成14年度)を最後に、この授業から撤退してしまったために、担当教員は筆者ひとりとなってしまった。筆者としては、立ち上げ後の学生たちの嬉々として授業に集まり、練習に没頭する姿、授業開始から正味4ヶ月の間に見せる歌・踊り・演奏、もの創りスキルの飛躍の向上度だけでなく、学生個々人の「人間的成長」ぶりを目の当たりにしていたため、これほどの意義ある、また青年の人格的成長に寄与できる授業を廃講には絶対にならない、たとえ担当が自分ひとりになろうとも持続開講していこうと決意を固め、単独担当科目として提供し続けることとなった。

しかしその一方で、それまで教員4名で進めていた時でも、教える側にかかなりのエネルギーを要する科目であったがために、筆者だけで、タイトル設定、台本作り、オーケストラ(というより当時は楽器群の小アンサンブル伴奏)のパート譜作成と指導、訳詩と歌譜づくり、歌の音楽指導、キャスティングとキャストへの演技指導、演出、脚色、ボディムーブメントの指導、練習スケジュール立案、衣装計画立案、ものづくり指導、そして当日の指揮等々の全てを行うことは、時間的制約の上から不可能に近いと判断し、単独開講が始まった1年目には、「演出」と「演出補佐」だけを、まずは学生に依頼し、残りは筆者が責任を取るということにした。

こうして2003年(平成15年)2月「屋根の上のバイオリン弾き」は大学会館にて、後期試験期間中に試演会としての公演発表を終えることが出来た。演出を担当した学生は、その後のことになるが、卒業後、即興演劇界で活躍し、また地域のホール主催の子どもの演劇指導等でも地域教育に貢献している。また演出補佐を担当した学生は、NHK沖縄放送局に合格し、1年目にはAD(アシスタント・ディレクター)に、2年目にはディレクターに抜擢され番組制作者ともなった。後に後者が筆者に語ったところによれば、就職試験の面接の折、「琉球大学で学んだ最も印象深い授業は？」という面接官の問いに応じて、このミュージカルの授業で経験したことを次から次へと熱弁したことが合格の決め手になったとのことである。そういう面では、RMはキャリア教育的メリットも持つものといえよう。このことに関しては、プロフェッショナルとのコラボレーションのところでも詳述する。

3. 部分的学生主導型授業から完全学生主導型を目指した経緯

瓢箪から駒、必要は発明の母の格言どおり、こうして着手した<部分的学生主導型授業>のあり方が、責任者となった学生において、非常に顕著に、上述した「人間的成長」が際立って見られたことから、筆者はこの授業を何年かかってもよいので<完全学生主導型>授業に徐々に移行発展させていき、様々な部署での責任者となる学生を育てることで、さらに青年の人間的成长を図っていこうと決意した。こう筆者が思い立ったのは、文科省が教育におけるアクティヴ・ラーニングを標榜・推奨し始める遙か以前のことであるのだが、そのようにすれば、各部署で責任者となった学生は、学生でありながら、未経験もしくは新来の学生を指導する使命を担い、また果たしつつ、協働性を発揮しつつピア・サポート型の成長が、教える学生にも、また教えられる学生にもみられるのではないかと考えたのからである。これは所謂「いもごち」の原理である。

「いもごち」とは、農家でじゃが芋収穫の際に、真っ黒い土の付いたジャガイモを水を張った大きな桶にぶち込み、その桶の両側を人が持って揺ると、中のジャガイモたちが互いに擦れあって、やがて泥が落ち、出荷にちょうど手ごろな状態となることをいう。まさしく文字通りの切磋琢磨状況を作り出すのである。今で言うアクティヴ・ラーニングの雛形ともいえるわけであるが、筆者は必要に迫られて、すでに平成15年度から積極的にこの授業で、このスタイルを実践

してきたことになる。

しかし学生が学生を教える、その教え方が的外れであったり、効率が悪かったり、本来の目的から逸れたものであってはならないし、また学生どうしの人間関係が悪くなってしまつては困るので、その点は常に担当教員が監督し続けるという体制を作り上げる必要があった。まずは主導型学生としての制作部を結成し、(平成16年度は6名の主導型学生による制作部が結成された)その中で役割分担を行い、毎週1回の制作部会議を半年をかけて開くこととした。その当時はミュージカルの発表公演は後期試験週間に行っていたので、制作部の会議は、それに先立つ前期中に持つこととした。これら制作部に参入した学生は、まったくの無単位であったが、RMも続けたい、そこでの感動体験を未経験の学生にも味わってもらいたいと強く望む学生たちが主体的に取り組んでくれたのである。前期中の制作部会議では、後期に取り組む作品候補を、制作部学生たちが次から次へとプレゼンテーションを行い、最終的に投票で決定する。それと平行して制作部内での役職決めを行っていきつつ、各部署が授業期間における練習計画、作成計画、運営計画の原案を提示し、全員で協議し決定していくのである。こうして平成16年度の演目は「キャッツ」と決定した。

4. 歓喜の享受者から歓喜の提供者へのシフトアップ

総合演習における筆者の教育目標・人間力向上は何段階かに分かれている。まず第1段階は、こういった総合舞台芸術的異年齢集団活動を初めて経験し、他者と協力してひとつの目標に向かって舞台芸術作品を作り上げていく過程において、自他理解を深め、協働力、コミュニケーション力を向上させ、問題発見力・問題解決力を強化しつつ自己効力感を高め、最終目標を成し遂げたときの達成感、自尊感情の昂揚がなされ、そして、生涯忘れることの出来ない感動体験をする、というもので、これを筆者は「歓喜の享受者となること」と名づけている。第2段階は、リピーター学生が制作部員、もしくは受講生の中のリーダー的立場となり、自分が過去に得た感動体験を新受講生もまた体験できるようにと配慮し、準備し遂行していく「歓喜の提供者となること」、にある。

自分が楽しんで幸せな気持ちになることよりも、他者が楽しみ幸福感を得たその姿に接して自分もまた幸せを感じるという構造的幸福感の感得である。これはいってみれば、「教師としての立場」「芸術家としての立場」さらにこれは、こと・ものを提供することで他者が喜んでくれる姿に、最大の幸福を感じることに出来る職業人全てに通ずることともいえよう。

こうした人間的成長を楽しく身につけることの出来る仕組みを、今後はどの教科においても工夫を凝らし計画推進する必要があると感じている。一方、ミュージカル活動は楽しいだけではない。苦しいことも多々ある。人間関係に悩むこともあろう、他教科の勉強の時間をどう捻出するかという「時間革命」に迫られる学生もいる。そういった様々な悩み苦しみを、協働作業の中で互いに切磋琢磨し合い乗り越えていく、そうしていく中で学生に自己成長の手ごたえを得てもらいたいというのが、授業担当者の心からの願いでもある。

5. ダンスが突破口となった地域連携教育の導入～ボランティア協力の参入

さて、この科目設立からの演目の歴史を辿ると、まずは「コンコーネ50番から生まれたミュージカル～白雪姫」に始まり、「ザ・サウンド・オブ・ミュージック」「屋根の上のバイオリン弾き」といった演目を行ってきたために、その中で必要とされるダンスシーンは、さほどダンス専門の経験や指導技術を必要とするものでもなく(もちろんプロ団体の公演では、これらのミュージカル作品のダンスシーンを絢爛豪華に洗練された演出で展開するものもあるが)、いってみればそれまでのRM作品では、せいぜい「フォークダンス風な動き」で何とかこと足りていた。しかし、作品が「キャッツ」となると話が違う。ダンサブル・ミュージカルの代名詞とも言うべき

作品である。この作品のもろもろのダンスシーンだけは、何としても、しっかりとしたコレオグラフィ（振り付け）とインストラクションが必要であり、バレエやダンスの専門家を招聘して学生の指導にあたってもらわなければならない、という状況に追い込まれた。

しかし、かつて廃講の危機を乗り越えたこの科目には、困難に出会うたび新たな支援者を引き寄せる不思議なエネルギーがあるらしい。ちょうど筆者が琉球大学に赴任してから、沖縄でのコンサート活動に手を貸してくれていた世話役の人から、同じ仕事場で働く女性が、どうも中高生の頃からストリートダンスをやっていた経験を持っているらしいという話を聞き、この人に出会う機会を作ってもらった。この女性—久場聖子さん、当時22歳—にRMの話をする、喜んで、しかもボランティアで、基礎トレーニングから、学生にダンスを教えてくれることになり、ゆくゆくは振り付けの仕方、振り渡し（振り付けの原案を他の受講生たちに教えていくこと）のやり方まで学生に伝授してくれるということになった。一方、学生による制作部はこのとき、前述のように、6名となっていたので、歌の訳詩の一部も学生に担当してもらおうと考え、さらに演出・演出補佐はもとより、統括、監督、衣装などの係を担当する学生も選出された。

学生の中には、初めて授業で体験したミュージカルに魅力を感じ、2年目、3年目と授業を聴講で取る（つまり単位はもらわなくてもいいので授業に参加させてほしいと望む）学生がリピートを重ねるようになってきた。このときから筆者は、RMは毎年違った作品に新たに取り組む授業であるので、リピーター学生にも単位が付与できないかと考え、学務係と相談の末、受講2年目、3年目、4年目の学生が取ることの出来る「民族と音楽Ⅰ」「同Ⅱ」「同Ⅲ」という科目を新設した。

現在、教科専門である筆者は、音楽教育専修の4年次学生が必修として取る教職課程最終ブラッシュアップ科目である「教職実践演習」も教科教育教員とTTで担当しているが、これを地域連携教育をテーマとして展開している。小学校の教員、中高の音楽教員となった時に、音楽の教科書に記載されている学習内容が、自分が身につけてきたもの以外であった場合、現場の教員は、はたと困ってしまうことが多々ある。たとえば、音大を卒業しても大抵、邦楽科でない限り、現役時代に学ぶもののほとんどは「洋楽」である。しかし音楽の教科書には「雅楽」「歌舞伎」「文楽」「三味線」、沖縄で言えば「組踊り」「歌三線」といったことを専門に学ぶことは、ほぼないに等しい。その分野に大して専門知識や技術がないにも関わらず、同じ音楽であるからといって、知ったかぶりをして教えること、或いは、教えずに飛ばしてしまうことをせず、地域教育コーディネーターの仲立ちを活用しつつ、校長の理解を得ながら、地域の専門家を学校に呼び込んでボランティア・インストラクターとして授業を持ってもらい、専門家が子どもたちを教える場面に音楽教師も触れ、観察・体験学習しながら、その分野の専門知識と技術を専任教員自身も身につけていくことが出来るのである。

筆者も音大時代に「ボディー・テクニク」という授業で、レオタードにバレエシューズを履き、バレエの基礎やバー・レッスンを受けた経験はあるものの、だからといって、クラシック・バレエ、コンテンポラリー、ジャズ、ストリート、ロック等々多岐にわたるミュージカルのダンスシーンを教えることは全く以って困難である。RMのこの時期(2003年前半)において、筆者も必要に迫られてではあったが、一種の地域連携教育を積極的に取り入れていったわけである。

6. 大学内での内部発表公演のみから市民ホールでの学外発表公演への挑戦

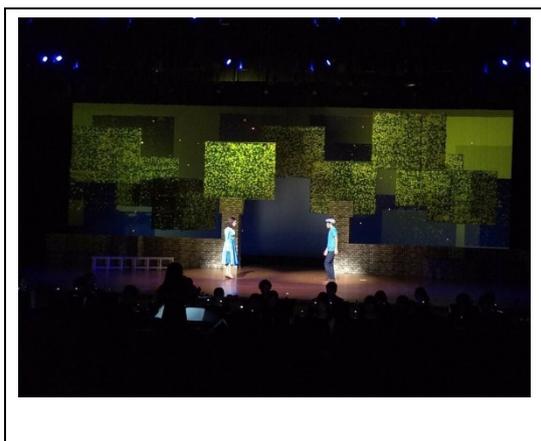
さて、平成16年(2005年)を迎え、琉球大学は法人化の道を歩み始めた。それまでは、例えば、音楽科の授業、研究の成果を、教員と学生が協力して社会へ発信するコンサートとして続けてきた「琉大音楽科発表会」では、大学の公的資金を用いて行うこととされ、経費獲得のために、チケットを売っての有料公演にすることも、プログラム・パンフレットに企業の協賛広告を掲載する見返りに、企業側から協賛金を出資してもらおうという行為そのものがご法度とされていたの

であったが、法人化されてからは大学がいわば会社組織化し、大学には従来ほどの運営交付金が財務省から下りてはこないの、外部から資金を獲得してくることを大学が推奨するという、運営面においてはこれまでとは真逆、180度の方向転換をしていくこととなった。

これに伴い、教育学部への研究費教育経費も大幅に節減され、結果、各教室への研究教育経費支給額の減額、ゆえに教員一人ひとりへの研究教育経費もそれまでとは比べ物にならないほどの額に激減してしまうこととなった。RMの練習と本番で用いる種々の物品購入、修理費等々も、それまでは全て筆者個人の経費から賄っていたが、この期に及んでそれではあまりに不十分になると予測された。このままではこの授業は立ち行かなくなることは目に見えていたので、筆者は先手を打ち、外部企業の経営コンサルタントやブレイン的副業を行いはじめ、その代償として、こういった企業から琉球大学へ寄付金を納めていただき、これをRMでの経費のみに用いることの出来る、所謂「紐付き寄付金」としていく策に出た。

しかし、ものは考えようである、大学も親方日の丸から独立採算への道を歩み始めたこの氷河期に、こうした経済苦を打開するために、逆境を順境に転換しようと腹を決め、学生にひとつの大きな提案を行ったのである。それが、これまでの大学内部での発表公演ばかりなく、外部のシティー・ホールを用いての大々的な「外部発表公演」にしていってはどうかという提案であった。

筆者には、この授業を学生一人ひとりの人間的成長の場とするためにひとつの思惑があった。それは、人間力のひとつである、勇気を持って発言し、自分の青春時代を賭けて熱中していることについての素晴らしさを、一般社会の人々にも知らせ、賛同してもらえるような「伝達表現力と交渉力」をつけるというものである。外部公演を有料で行い、チケットを啓蒙し、パンフレットへ協賛企業の宣伝広告を掲載して広告料を頂き、文化活動の経済的基盤を構築するという経験を青年にしてもらいたいと考えたわけである。こうして平成16年(2004年)度RM「コーラス・ライン」公演を、2005年2月、読谷村鳳ホールで開催した。RMが初めて大学から沖縄の社会へと飛び出した記念すべき公演となった。その後は現在に至るまで、内部発表を琉大の施設である大会館又は第1体育館で、外部発表を、うるま市石川会館、浦添市てだこ大ホール、嘉手納文化センター大ホール、沖縄市民会館大ホールなどで開催し、地域交流。地域文化貢献にも一役かっている。



RM2015 ビッグ・フィッシュより 感動のダッフオディルズ(黄水仙とプロポーズシーン)

7. 様々な外部協力者とのコラボレーション～キャリア教育的側面の強化

外部の市民ホールでは、音響照明機材等を直接学生が触ることを許可していない。さらに、凝った音響プラン、照明プランを計画したとなると、もはやホールの専属スタッフは対応してはくられず、「プロ・スタッフを導入してほしい」ということになる。プロ・スタッフを雇い入れるとな

ると、これに対しても人件費、機材レンタル代がさらに上乘せとなるわけであるが、制作部学生は、上演作品がいい音響といい照明によって、さらにグレードアップしていきたいと望み、すすんでプロフェッショナルの導入を行うこととなった。プロの音響照明としては、外部第1回公演では沖縄舞台に、第2回以降はサウンドパッケージに依頼している。後者では仲村功氏（音響）やその後紹介で岸本智治氏（照明）、近年ではホットスタッフから米須利明氏（照明）が入って下さっている。また舞台として道具・装置の作製段階から慶田盛貞斗氏（Kカンパニー）が協力してくださっている。外部業者に関しては、安易に前年度を踏襲するのではなく、制作部学生とも毎年協議し、必要経費の点や、学生とエンジニアとの円滑なコラボなどの面を協議した結果、取り決めをしている。彼らプロにアドバイスをもらいながら、本番では学生の音響照明係が機器操作をしつつ、また道具の転換等々の技を磨いていく体験をさせてもらっている。

総合舞台芸術にとって欠かせないものに衣装がある。衣装作製及びコーディネートに関しては筆者が沖縄に赴任してからのイベントでのコラボレーションを重ねてきたエスティヌ産業代表の仲宗根幸子氏がボランティアで協力してくださっており、コザのエスティヌ産業の工房では、学生衣装係が、仲宗根氏の指導の下、採寸の仕方、型紙の作り方から始まり、舞台衣装等の縫製作業をしつつ、プロの縫製技術やコスチュームを仕上げていくときの目の付け所などまでを学生は身につけさせてもらっている。

RMはジェネラル・アドバイザーとして、沖縄出身で本場ブロードウェイでレギュラー・キャスト歴も長い、高良結香氏についていただいている。高良氏は、琉大ミュージカル公演を1ヵ月後に控えた7月に帰沖されることもあり、その場合は実際に学内発表公演（7月第1日曜日）を観劇していただきアドバイスをいただくこともあり、またアメリカでの仕事が入ってしまい日本に帰ってこられないときは、DVDもしくは動画を添付ファイルにしてメールで送り、それに対するアドバイスを送っていただくなどしている。彼女は全て英語で書いてくださるので、それを受講生用に筆者が猛スピードで訳し、受講生全員に配布して読ませ、その後の外部発表公演へ向けての貴重な助言として活用させてもらっている。



RM2017 キャッチ・ミー・イフ・ユー・キャンより圧巻の飛行機離着陸演出とダンスシーン

8. 著作権使用に関する教育的態度

有料公演となると、それまでのように教育的意義をかざして著作権使用申請を免れるなどということはもはや出来ないし、あってはならない。学生に対しても創作物の著作権者の権利を尊重する態度を持ってもらうため、著作権保有会社との交渉を筆者は進め始め、ブロードウェイ・ミュージカル、ロンドン・ミュージカルなどの作品を上演決定していくプロセスで、米英の著作権会社とメールで交渉を重ね、毎回法的手続きをクリアしながら上演を行っている。こういった外国の会社との交渉は、教育機関の場合は、専任教員が代表者とならなくてはならないので、学生主導型授業とはいえども教員の役割として継続している。

9. 冬公演から夏公演への切り替え

現在、RMは、発足当初の後期授業&冬公演から、前期授業&夏公演となっている。これは冬場、後期末には音楽科の発表会もあるため、学生の負担や練習場のバッティングなどを避けるために、開講時期の変更を行うこととなった（平成20年、2008年）ためである。この年には2月に冬公演を行ったが、その年の8月に、もう次の公演を打つという離れ業を敢行した。次の公演を翌年まで延ばす手もあると筆者は示唆したが、制作部学生たちは、是非、その年の夏に行いたいというすごい情熱でこれを進めていったのであった。

夏公演へ向かっていくとき、冬公演と全く違う状況は、附属小学校や近隣の公立小学校の体育館を借りての総合練習のときに、冷房設備のない場所で長時間、大量の汗をかきながら練習し続けなければならないという点である。冬でさえもミュージカルの練習では、汗をかくのだから暑い夏では、それこそ熱中症の危険性もあるため、練習中の健康管理、水の摂取、適度な休憩を入れた効果的な練習スケジュール立てなどが重要になってくる。制作部員は常に練習の際に、キャスト、スタッフオーケストラ・メンバーの顔色、動きの様子等を注視し、体調不良者はいないかを常にチェックし、応急用製品の準備・休憩スポット設置（通称「オアシス」）も欠かさない。

10. ものづくりへの情熱昂揚と共通教育としての「ステージスタッフ総合活動」

ミュージカルなどの音楽劇作品には通常キャスト、スタッフ、オーケストラが欠かせないが、一番目立ち、文字どおり「脚光を浴びる」のは何といてもキャストであろう。RMも初期のうちは学生の多くはキャストをしたがり、その次にオーケストラ。これも伴奏が使命とはいえ、RMの場合はオープン・オーケストラピットであるので、やはり衆目に晒されるという点では2番目に目立つ存在である。しかしスタッフとなると影の仕事。黙々と舞台道具を作り、背景画を描き、キャストを輝かせるためにバックから支える女房役的存在であるともいえる。初期にはスタッフを志望する学生は少なく、どうやって背景画を仕上げるか、道具を作ることが出来る人数を確保できるかが悩みの種でもあったが、次第に「ものづくり熱」が昂揚し始め、最近の作品では、ステージいっぱい咲き乱れる黄水仙（“big fish”）、離着陸する巨大な飛行機（“Catch me if you can”）などを作製することに喜びを感じて、積極的にスタッフを志望する学生が増え、近年において、この傾向があまりに顕著であるゆえに、筆者は共通教育としての「ステージスタッフ総合活動」の設置を考えるに至った。スタッフという影の立役者になることを自ら進んでやろうとこと、所謂自発的に「縁の下の力持ち」になろうという精神は、非常に尊いものであり、教育的意義に富んでいると感じられる。



RM2018 雨に唄えばより 美術道具スタッフの作業風景



RM2018 雨に唄えばより 衣装係りスタッフの作業風景

以上、概括的にはあるが、RMの草創期から現在に至るまでの歩みを辿ってみた。RMは、総合舞台芸術的異年齢集団活動という形の中で、学生が学生を教え、またその教え方を考案し、練習準備段階にあっては、先輩と後輩のふれあいが互いの刺激と啓発を生み、他学部学科学生同士の交流が深まり、プロフェッショナルとのコラボ経験によりキャリア教育的刺激も学生に与えられている。そのプロセスの中で、前述したように、様々な側面における人間力の向上が見られる、文字通り「生きる力」を育む授業となっている。ミュージカル活動を通して、今後も学生たちはさらに、そして、より逞しく人生を生きていく素地が作られていくに違いない。